

『葉っぱだけの信仰』

'21/07/04

聖書箇所: マルコの福音書 11 章 11-19 節 (新約 p.89)

先週、私たちは、あのイエス様がいよいよ、十字架にかかるために、エルサレムの町に入城されるというシーンを見てまいりました。先週にも言いましたけど、とうとう、イエス様が十字架に磔にされるまで、残り1週間を切ったというタイミングであります。

しかし、一体、どうして、イエス様は、ご自分が十字架に磔にされるということをご存知の上で、自ら進んで、エルサレムの町へと行かれたのでしょうか？ どうして、イエス様は、ご自分が死刑にされることをご存知で、あんな惨たらしい十字架へと向かっていかれたのでしょうか？ …今日、ぜひ、皆さんにお願いしたいことは、信仰をお持ちの方も、そうでない方も、今一度、イエス様があの十字架にかけられた意義と言うか、その目的について考えていただきたく思います。

命題: 当時に蔓延っていた、「見せかけだけの信仰」とは？

聖書のみことばは、前回の続きであるマルコ伝 11:11-19 になります。そこから、今日、私たちは、今から約 2000 年前、当時に蔓延っていた「見せかけだけの信仰」について学んでいきます。願わくは、今日、このメッセージを聞いてくださった皆さんが、今一度、自分自身の信仰や生き方といったことについて見つめ直していただき、できましたら、今日を境に、新しいいのちと人生を手に入れていただき、ますます、主に喜ばれる歩みを始めていっていただきたく思います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばである、マルコ伝 11:11-19 のみことばをご覧ください。

I・呪われた いちじく の問題点！ (11-14 節)

どうぞ、まずは、今日のみことばの前半である、マルコ 11:11-14 のみことばに注目していきましょう。ここ 11 節のみことばが先週に学んだ部分と重なりますが、ここ 11 節だけ、内容的に、その前の部分に繋がらるべきか、あるいは、今日の部分と繋がるのか、よく分からなかったため、このようになってしまいました…。まずは、ここ 11-14 節のみことばを通して、**ここでイエス様が呪われた“いちじく”の問題点について**見ていきましょう。その、11-14 節には、このように記されてあります。

- 11 こうして、イエスはエルサレムに着き、宮に入られた。そして、すべてを見て回った後、時間ももうおそかったので、十二弟子といっしょにベタニヤに出て行かれた。
- 12 翌日、彼らがベタニヤを出たとき、イエスは空腹を覚えられた。
- 13 葉の茂ったいちじくの木が遠くに見えたので、それに何かありはしないかと見に行かれたが、そこに来ると、葉のほかは何も無いのに気づかれた。いちじくのなる季節ではなかったからである。
- 14 イエスは、その木に向かって言われた。「今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように。」弟子たちはこれを聞いていた。

●『葉の 茂った いちじく』とは？

さて、このみことばが教えてくれているように、この時、イエス様の一行は、一旦、エルサレムの町に入られましたが、もう時間も遅かったということで、ベタニヤという町へ移動されます。ここエルサレムから、そのベタニヤまでは、3km ほどの近場だったので、この時、イエス様たちは、今日のみことばの最後、19 節が教えるように、昼間はエルサレムに行かれて…、夜はベタニヤに泊まれるという感じだったようです。ベタニヤと言うと、多分、皆さんもよくご存知の、あのマルタとマリヤの姉妹と、その兄弟のラザロが住んでいた、ひょっとしたら、この時、イエス様の一行は、彼らの家に滞在されたのかも知れません…。

さて、今日、私たちが見ていこうとしていこうとしている出来事は、イエス様があの十字架に磔にされる直前の月曜日に起こったことであると考えられています。…とすると、もう、この4日後に、イエス様は十字架にかかれるわけです。

どうぞ、今日のみことばの 12 節に注目してください。…この時、イエス様は空腹を覚えられたと、みことばは教えます。…すると、そこに、『葉の“茂った”いちじく』の木が遠くに見えました。そこで、イエス様が、そのいちじくの木に近づかれると、そのいちじくの木には、「葉の他は何も無かった…」というわけです。そこで、イエス様は、14 節にあるように、『今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように…』と言って、そのいちじくの木を呪われるわけです。…実は、今日のみことばには記されてありませんが、すぐ後の、20-21 節を見てみますと、その翌日には、その木が根っこまで枯れていたとか、イエス様が呪われた、ということが記されてあります。

さて、今日まず、私たちが考えたいことは、一体、どうして、イエス様は、そのいちじくの木を呪われたのか？ という点であります。…そのために、私たち…、まずは、簡単に、この地方のいちじくに関する情報について知らなければなりません。きつと、皆さんもこれまでに、いちじくの実を見たり…、食べたりされたことがあると思います。

実は、「いちじく」と言いますのは、原産がメソポタミア地方(つまり、この近く)だそうで、はるか、6千年以上も前から栽培されていたことが分かっているのだそうです。…ですから、きつと、皆さんもご存知だろうと思います。創世記 3 章で、人類初めての罪を犯した、あのアダムとエバたちが、自分たちが裸であることを気付いた時、彼らは、『…いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。』(創世記 3:7)と記されてあります。

実は、いちじくには、大きく分けて、3つの品種があるそうで、①夏頃に実を实らせる品種(=これを、「初なりのいちじく」と言う)と、②秋頃に実を实らせる品種(=秋いちじく)…、そして、③夏と秋の両方に実を結ぶ品種もあるのだそうです…。恐らく、この当時、この地方にあつたいちじくは、大体、イエス様をご覧になった、3 月の終わりか 4 月の初め頃に、たくさん葉を茂らせて、いちじくの出芽するような品種…、つまり、「初なりのいちじく」でありました。その「初なりのいちじく」は、しばらくすると、その芽が落ちて、そして、6 月頃までに、いちじくの実を实らせるのだそうです。

つまり、イエス様をご覧になった時、そこには、たくさん葉だけでなく、そこに、「いちじくの出芽」が生えていないといけなかったのです。しかし、イエス様をご覧になった時、そのいちじくの木は、どんな状態であつたと、このみことばは教えてくれています？

⇒13 節のみことばには、『葉のほかは“何もない”のに気づかれた…』と記されてあります。そうです！その木には、たくさん葉が茂っていただけで、肝心の実を結ぶために必要な芽が全然生えていなかったのです！…だから、この時、イエス様は、ある意味失望されたのです…。

●イエス様の 呪い ！

そこで、イエス様は、14 節にあるように、『今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように。』とおっしゃって、そのいちじくの木を“呪われ”ます。…だから、その翌日には、その木が枯れてしまったのです。前回にも言いましたように、イエス様のなさることには、常に何らかの意味や理由があります。…そうでしょ！ 皆さん？ じゃあ、一体なぜ、イエス様は、この時、そのいちじくの木を呪われたのでしょうか？

実は、いちじくという果物には、象徴的と言うか、ある特別な意味があつたのです。ついさっきも、チラッとご言いましたように、聖書といちじくには、かなり古くからの関係があつたことは申しました。そこで、どうぞ、旧約聖書の預言書であるエレミヤ書に記されてあるみことばを紹介させていただきます。エレミヤ書 8:13 には、

こう記されてあります。『13 「わたしは彼らを、刈り入れたい。——【主】の御告げ——しかし、ぶどうの木には、ぶどうがなく、いちじくの木には、いちじくがなく、葉はしおれている。わたしはそれをなるがままにする。』…いかがです？ここでは、神の民として選ばれたあのイスラエルが、ぶどうやいちじくに例えられています。しかし、そのぶどうやいちじくには、肝心の実が実っていないどころか、しおれてしまっていると言うのです！…なのに、神であられる主は、それを、本当は刈り入れたいけれど、そのまま放っておかれる！と言うのです。一体、どうしてでしょう？

どうぞ、今度は、ホセア書 9:10 のみことばを紹介させていただきます。そこには、こうあります。『わたしはイスラエルを、荒野のぶどうのように見、あなたがたの先祖を、いちじくの実の初なる実のように見ていた。ところが彼らはパアル・ペオルへ行き、恥ずべきものに身をゆだね、彼らの愛している者と同じように、彼ら自身、思むべきものとなった。』…

⇒皆さん、分かっていただけます？…ここで、私が先程紹介した「初なるいちじく」に近い言葉が出てきましたでしょ？…実は、天の神様は、イスラエルのことを、まるで、「初なるいちじく」のように見ておられたのです！…にも関わらず、イスラエルは、偶像…、つまり、石や木でできただけの偽りの神々に目を奪われて…、モアブの神であったパアルなどを神としてあがめ、それらに仕えたのです…。ここでは、そういったことについて非難されています。

●イスラエルに与えられた 選択肢 ！

どうぞ、皆さん。もしできましたら、旧約聖書のヨシュア記をお開きいただけます？…そのヨシュア記 24 章 1 節以降には、こう記されてあります。『1 ヨシュアはイスラエルの全部族をシケムに集め、イスラエルの長老たち、そのかしらたち、さばきつかさたち、つかさたちを呼び寄せた。彼らが神の前に立ったとき、2 ヨシュアはすべての民に言った。「イスラエルの神、【主】はこう仰せられる。『あなたがたの先祖たち、アブラハムの父で、ナホルの父でもあるテラは、昔、ユーフラテス川の向こうに住んでおり、ほかの神々に仕えていた。3 わたしは、あなたがたの先祖アブラハムを、ユーフラテス川の向こうから連れて来て、カナンの全土を歩かせ、彼の子孫を増し、彼にイサクを与えた。4 ついで、わたしは、イサクにヤコブとエサウを与え、エサウにはセイルの山地を与えて、それを所有させた。ヤコブと彼の子らはエジプトに下った。5 それからわたしは、モーセとアロンを遣わし、エジプトに災害を下した。わたしがその真ん中で行ったとおりである。その後、あなたがたを連れ出した。6 わたしが、あなたがたの先祖たちをエジプトから連れ出し、あなたがたが海に来たとき、エジプト人は、戦車と騎兵とをもってあなたがたの先祖たちのあとを追い、葦の海まで来た。』(ヨシュア記 24:1-6)

…と、主なる神様が、当時、イスラエルのリーダーであったヨシュアの口を使って、これまで、どのようにして、主なる神様がイスラエルのことを守り、導いてくださったかを説明しておられます。天の神様は、元々、偶像に仕えていたアブラハムに目を留めて、そのアブラハムや子孫たちを導いてくださったのです！アブラハムには、もう不可能と思われていた息子イサクを与えてくださり…、その子どもたちに、たくさんの土地を与えてくださいました。その子孫たちがエジプトへ下って、奴隷となった時には、モーセやアロンを通して、神があつたエジプトから救い出してくださいました。しかも、そのエジプトが軍隊を出して、イスラエルを追ってきた時には、神がその軍隊を滅ぼして、イスラエルを救ってくださったわけでしょ！

どうぞ、少し飛ばして、今度はヨシュア記 24:14-18 をご覧ください。…ここで、ヨシュアは、イスラエルの民たちに対して、2つの選択肢を与えます。『14 今、あなたがたは【主】を恐れ、誠実と真実をもって主に仕えなさい。あなたがたの先祖たちが川の向こう、およびエジプトで仕えた神々を除き去り、【主】に仕えなさい。15 もしも【主】に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、川の向こうにいたあなたがたの

先祖たちが仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のエモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、【主】に仕える。」16 すると、民は答えて言った。「私たちが【主】を捨てて、ほかの神々に仕えるなど、絶対にそんなことはありません。17 私たちの神、【主】は、私たちと私たちの先祖たちを、エジプトの地、奴隷の家から導き上られた方、私たちの目の前で、あの数々の大きなしるしを行い、私たちの行くすべての道で、私たちの通つすべての民の中で、私たちを守られた方だからです。18 【主】はまた、すべての民、この地に住んでいたエモリ人も、私たちの前から追い払われました。私たちもまた、【主】に仕えます。主が私たちの神だからです。』

⇒いかがです？…ここで、ヨシュアは、イスラエルの民たちに対して、真の神である主に従い続けるか、あるいは、石や木でできただけの偶像の神々に仕えるか、そのどちらかを選びなさい！と言うわけです。…この後のみことばもそうですが、特に、申命記 11 章のみことばを見ると、イスラエルに与えられた選択肢は非常にシンプルです。「もしも、イスラエルが真の神を信じ、その神に従い続けるなら、そこには祝福が伴う。しかし、その逆に、真の神を離れて、偶像の神々に仕える時、そこには、呪いが生じる！」…そんな感じです。

すると、イスラエルの民たちは皆、声を上げて、こう叫んで誓うわけです、「私たちが【主】を捨てて、ほかの神々に仕えるなど、絶対にそんなことはありません！（ヨシュアだけでなく、）私たちもまた、【主】に仕えます！主が私たちの神だからです！」…しかし、その結果は、どうでした？…どうぞ、皆さん。ぜひ、できましたら、この後のサムエル記や列王記などを読んでみてください。…果たして、あのダビデ王様は、真の神様だけに仕えました？その息子、ソロモンはどうでした？彼の歩みは、本当に、神様に喜ばれるようなものであったのでしょうか？

残念ながら、彼らだけではありません…。イスラエル全体が、この時の誓いを忘れて、真の神様の前に忠実に歩もうとはしなかったのです！…だから、その後、イスラエルの民たちは、何度も何度も試練に遭って、やがては、自分たちの国さえ失ってしまったのです。そうでしょ！

どうぞ、今日のみことばの 14 節に戻ってください。…この時、イエス様は、ただ単に、そのいちじくの木を呪われたわけではありません。イエス様は、そのいちじくが指し示していた…、イスラエルの民たちが、やがて、神様に対する不信仰のゆえに、神様から大きな呪いや罰を受けるであろうことを、この時、このイチジクの木を通して預言してくださっていたのです。このイチジクは、単なるイチジクの木ではなく…、イスラエルの象徴であったのです。

II・当時の 神殿 にあった問題点！（15-19 節）

どうぞ、今度は、今日のみことばの内、15-19 節の部分に注目してください。そこのみことばが教えてくれているのは、この当時の「神殿」にあった問題点であります。そこには、このように記されてあります。

- 15 それから、彼らはエルサレムに着いた。イエスは宮に入り、宮の中で売り買っている人々を追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒し、
- 16 また宮を通り抜けて器具を運ぶことをだれにもお許しにならなかった。
- 17 そして、彼らに教えて言われた。『わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる』と書いてあるではありませんか。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしたのです。」
- 18 祭司長、律法学者たちは聞いて、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。イエスを恐れたからであった。なぜなら、群衆がみなイエスの教えに驚嘆していたからである。
- 19 夕方になると、イエスとその弟子たちは、いつも都から外に出た。

● イエス様の 暴挙 ！？

今度、ここでは、その同じ日の月曜日に起こった出来事について記されています。…一見、この出来事は、ついさっき見たことと関係無いように見えるかも知れませんが、もちろん、そうではありません…。まずは、この時に、イエス様が起こした、ある種の“暴挙”とも言い得るような行動について説明させていただきます。

この時、イエス様は、『宮』に入られたと、今日のみことばは教えます。ここで言われている『宮』とは、いわゆる、エルサレムにあった神殿のことで、一般的には、「ヘロデの神殿」と呼ばれています。…と言いますのは、1番最初、ソロモンによって建てられた神殿が「第一神殿」で…、この神殿は、南王国がバビロンによって陥落した時に崩されてしまいました。

そして、その次に、「第二神殿」が建てられます。これは、70年間のバビロン捕囚後に、ゼルバベルたちが中心となって神殿を建てたために、「ゼルバベルの神殿」とも言われます。この第二神殿は、B.C.37年に、ローマによって滅ぼされます。

その後…、3番目に建てられたのが「ヘロデの神殿」で、これは、マタイ伝 2章に記されている、イエス様を殺そうとした、あのヘロデ大王によって、B.C.20年頃に建てられました。…これが、イエス様の当時、エルサレムに建っていた神殿であります。

実は、この時のエルサレムの神殿には、大勢の人たちが集まってきておりました。…と言うのも、「逾越の祭り」が近かったからです！この時、エルサレムには、エルサレムの周辺からだけでなく、大勢の者たちが至る所から集まってきていたはずであります。その目的は何でしょう？…それは特に巡礼…、言い換えると、神様に捧げ物を捧げるためでありました。…と言っても、エルサレムには、この時だけでなく、いつも、大勢の者たちが捧げ物や礼拝を捧げるために集まってきておりました。…そんな時、イエス様が、商売人や両替人たちの台や腰かけを倒したり、彼らのことを追い出されたりしたのです。

● 商売人 たちの目的！

しかし…、何かの大きなイベントやお祭りの時に、大勢の者たちが集まってくるということは、恐らく、世界中でも…、ここ日本でも同じでしょう。ここ現代の日本でも、大きな神社やお祭りなどに行くと、そこには、大勢の人たちが集まっております。…すると、そこには、必ずと言って良いほど、たくさんの出店や縁起物売っているようなお店がありますでしょ？…基本的には、それと似たような感覚…、似たような事情なのだろうと思います。この当時のエルサレムの神殿にも、大勢の者たちが集まってきて、それゆえに、たくさんの店なども出店していました。…でも、そこで商売をしていた“商売人”たちの目的は何だったでしょう？

ちょっと、ここで、前の画面を見てくださいませ？…実は、ちょっと見にくいのですが、この真ん中部分にある…、かなり高い建物が、当時の第三神殿であります。そして、その下側にある小さな広場が、「婦人の庭」と呼ばれていました。「婦人の庭」と呼ばれていたのは、婦人たちは、ここまでしか入ることができなかったからです。…そして、その少し右側には、「異邦人の庭」があります。これまた、「異邦人の庭」と呼ばれていたのは、異邦人たちは、ここエリアまで入ることが許されていたからです。

実は、その「異邦人の庭」で、たくさんの商売人たちが両替人たちが居て、そこで、たくさんの取引がなされていたそうです。そのエルサレムの神殿で捧げ物をする時には、イスラエルの通貨…、つまり、「お金の単位は、シケルでなければならない！」ということが決められておりました。…当時、多くの者たちが捧げていたのは、1人20シケル…、それが捧げられない貧しい者たちは、鳩を捧げるようになっておりました。…と言っても、外国から来て、シケルを持っていない者やあるいは、鳩を持って、遠く外国から来るのも結構難しかったようです。

そこで、神殿の周りには、どうしても、外国の通貨をシケルに両替する必要がありました。そのために、両替人たちが居たのです。また、捧げ物を持ってきていない者たちは、そこで鳩を買う必要があったわけですが、その時、神殿の中で、商売をしていた者たちは、捧げ物を捧げるためにやって来た者たちの足元を見て、わざと、値段を高く設定して、商売をしていたのです。…言わば、暴利を貪っていたのです！

だから、17節で、イエス様はおっしゃるわけですが、『『わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる』と書いてあるではありませんか。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしたのです。』』って…。…この時、イエス様は、イザヤ 56:7¹とエレミヤ 7:11²を引用して、エルサレムの神殿のことを、『わたしの家』と表現しておられます。…イエス様にとって…、いえ、神様からすると、このエルサレムの神殿こそは、どこよりも清く…、聖別された場所でなければならなかったのです！

しかし、実際は？と言うと、そのような聖くあるべき神殿において、商売人たちが、捧げ物に来た者たちや貧しい者たちの足元を見て、金もうけと言うか、暴利を貪っている…。だから、イエス様は、そういったものを見て、「あなたがたは、神殿を強盗の巣にしている！」と言って、非難されたのです。

こうい理由から、この時に、イエス様がエルサレムの神殿で、商売人たちの台や腰かけを倒したり、彼らを追い出したりされたのは、所謂、“暴挙”などではなくて…、一般的には、「宮きよめ」と言われています。…と言いますのは、この時のイエス様が、神様のみこころに沿って、神殿を汚すようなことをしていた者たちのことを追い出されたからです。

● 祭司長 たちのもくろみ！

どうぞ、今日のみことばの 18節をご覧ください。ここには、当時の祭司長たちの“もくろみ”について記されています。そこには、こうあります。『祭司長、律法学者たちは聞いて、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。イエスを恐れたからであった。なぜなら、群衆がみなイエスの教えに驚嘆していたからである。』』って…。

ここで、当時の祭司長や律法学者が、いよいよ、イエス様のことを具体的に殺そうとしていたことが分かります。イエス様が3度に渡って、告知された通りです。…それと、このみことばには、この当時の祭司長たちがイエス様のことを殺そうとした理由と言うか…、彼らの目的について記されています。彼らは、群衆たちからの人気を欲していて…、それを、イエス様によって奪われたから、イエス様のことを抹殺してしまうと企んだのです。…つまりは、嫉妬です！

実は、今日のみことばには、はっきりと記されてありませんが、彼ら祭司長たちと神殿の管理人たちには、ある種の「繋がり」があったのです。…だから、今日のみことばのすぐ後、27-28節には、こうあるのです。『27 彼らはまたエルサレムに来た。イエスが宮の中を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちが、イエスのところへやって来た。28 そして、イエスに言った。「何の権威によって、これらのことをしておられるのですか。だが、あなたにこれらのことをする権威を授けたのですか。』』

⇒良いです？…ここで、祭司長たちが、神殿の中を歩いておられたイエス様に向かって、「あなたは、一体、何の権威によって、これらのことをしておられるのですか？」と尋ねた…、『これらのこと』というのは、所謂、イエス様がされた「宮きよめ」のことです。

¹ イザヤ 56:7、『わたしは彼らを、わたしの聖なる山に連れて行き、わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。彼らの全焼のいけにえやその他のいけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれるからだ。』

² エレミヤ 7:11、『わたしの名がつけられているこの家は、あなたがたの目には強盗の巣と見えたのか。そうだ。わたしにも、そう見えていた。——【主】の御告げ——』

でも、残念だと思われませんか？…この当時、エルサレムには、ガリラヤ出身の弟子たちから見ると、マタイ伝 24 章に記されてあるように、「なんて大きな…、なんて立派な建物でしょう…」というような立派な神殿がそびえ立っていました。そこには、神様の臨在を示す聖所や至聖所などがあって、大勢の者たちがひっきりなしに集まって来て、神様を礼拝し…、その神様に捧げ物を捧げていたのです。その神殿には、神様に仕えているはずの祭司長や律法学者などの宗教家がいる…、彼らが、民衆たちを教え…、正しい方向に導いてあげるべきでありました。…そうでしょ？

なのに、実際は、その祭司長たちが、神殿で商売人たちが暴利を貪っていた…、その黒幕的存在であって、しかも、彼らは、イエス様の人気を妬んで、イエス様が真の神様から遣わされて…、正しいことを教えてくれたのに、そのイエス様のことを…、何と、約束の救い主であったイエス様のことを、殺そうと企んでいたのです！

<励ましの言葉>

今日、私たちが最初に学んだ、あの葉っぱばかりで、少しも芽を出していなかったいちじくの木…、あれは、表面的な行ないや聖書的な知識しか持っていなかった、当時のイスラエルを象徴しています…。彼らには、神様が期待しておられたような実を結んでいなかったし…、その実に繋がるような芽も見られませんでした。…と言うのは、彼らの内には、本物の信仰が無かったからじゃないでしょうか？

いつも言いますように、聖書的な知識は、私たちの救いに欠かすことができない必要なものですが…、しかし、聖書的な知識イコール、救われたことの証拠ではありません！…だから、私たちは、時々、間違えてしまうのです。「これだけの聖書的な知識があるのだから、この人は救われているに違いない！」って…。しかし、本物の信仰には、必ず、変化が…、あるいは、神様を愛するがゆえの行ないが伴います！…そうでしょ！

つい2週間前に、ヤコブ書 2 章のみことばを引用したばかりなので、今日は別のみことばを引用させていただきます。どうぞ、最後に、マタイ 25 章のみことばをお開きください。ここで、イエス様は、マタイ 24 章から話された「世の終わり」について話しながら、マタイ 25 章になってから、本当に救われた者たちと一見、救われているように見えて、実は、救われていなかった者たちについて教えてください。…どうか、皆さん。ご自分でも考えてみてください！…彼ら救われていた者たちと、救われていなかった者たちとの違いは、彼らの持っていた知識にあったでしょうか？…違うでしょ！

どうぞ、まずは、1-13 節をご覧ください。ここでは、10 人の…、花婿を出迎える娘たちの例え話があります。ここで、イエス様が言いたかったのは、その 10 人の内、5人は救われていて…、5人は救われていなかったということです。そうでしょ？…彼女たちの違いは何だったでしょう？⇒彼女たちは皆、同じ花婿のことを待っていて…、その知識と言うか、彼女たちの理解に大きな違いはありませんでした。違いは、たった1つ…、花婿がいつ来ても良いように、必要な備えをしているかどうか、だけでした…。

その次、14-30 節、ここでは、しもべたちにタラントを預けて出ていったご主人様の話が語られています。そのしもべたちの違いは何だったでしょう？…まず、5タラントを預かったしもべと2タラント預かったしもべたちに、何か根本的な違いはありません。彼らは両方とも救われていたのです。…問題は、彼らと1タラント預かったしもべとの違いです。彼らの違い…、その大きなものは、そのご主人様に対する忠実さじゃありません？…あるいは、そのご主人様に対する感謝があるかどうか、とも言い得るかも知れません。

そうして、最後の 31-46 節、ここでは、この世の裁き主として来てくださったイエス様が、すべての者たちを裁かれて、まるで、羊と山羊とを分けられるように、救われている者たちと救われていない者たちとを分けられる！ということが教えられてあります。彼らの違いは何でしょう？…私が思いますのは、愛があるかどうかの違いです。…しかも、その愛は、同じ信仰を持った兄弟姉妹に対する愛があるかどうか？です。

それによって、彼らの救いが本物かどうかを見極められる！ということイエス様は教えてくださったのです。

果たして、私や皆さんは、いかがでしょう？…ここマタイ伝 25 章のみことばだけではありません。実は、今日のみことばもまた、当時の、実を結ぶことのできなかったイスラエルを非難し…、警告を与えるものであります。また、後半部分で学んだ…、商売人や祭司長たちも、エルサレムの神殿の中で働きながら、彼らの信仰は死んでも同然でありました。彼らこそ、葉っぱばかり茂っているように見えて、実は、何の芽も、実も結ぶことが無いいちじく(あるいは、イスラエル?)、そのものであります。

しかし、問題は、私たちです。…確かに、この時のエルサレムには、田舎者の弟子たちが驚くほど、立派な神殿が建っていました。しかし、果たして、その中に、神様が喜んでくださるような信仰が見られたでしょうか？…いいえ。まるで、それは、バタニヤで見た、葉っぱしか付けていないイチジクと同様でした…。残念ながら、そこには、神様が期待しておられた実を結ぶ気配が無かったのです！

でも、私たちは、こういったことを教訓に…、自分たちの信仰をしっかりと吟味すべきです。「私は間違いないく救われている！」という確信を持って、残された人生を、神様からの祝福に満ちた人生を歩みながら、その信仰を成長させていくか？…あるいは、しっかりと、聖書のみことばや自分自身の信仰を吟味することなく…、「私は救われているに違いない…」と勝手に思い込んで、そうして、未信者とあまり変わらない人生を歩んでいって…、最後に、大きな後悔をしてしまうか？…どうか、今日、このメッセージを聞いてくださった方が、1人も洩れることなく、永遠の救いに預かってくださることを願います。

そうして、まだ、イエス様を信じておられない皆さん…。かつてのイスラエルがそうであったように…、また、当時、エルサレムで暴利を貪っていた商売人たちや祭司長たちも、そうであったように、私たち人間は皆、罪人です。誰一人、行ないや修行、あるいは、素晴らしい功績によって救われる人間などおりません！

イエス様は、ヨハネ伝 15 章で、「まことのぶどうの木である、イエス様に繋がることなくして、私たちが、真の神様に喜ばれるような、価値ある実を結ぶことはできません。イエス様を離れては、私たちは何もすることができない！…誰でも、もしイエス様に繋がることしなければ、枝のように投げ捨てられて、火に投げ込まれる…、つまり、永遠の裁きに下る…」ということを教えてくださいました。

どうか、1日も早く…、私たち人間に与えられた唯一の救い主であり…、同時に、真の神であられるイエス・キリストを信じる信仰によって、神様だけが与えることのできる救いの恵みに預かってください。心から、皆さんにお勧めいたします。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。